

九月十五日

昨日「室内」の眼ざわりデザインの連載にかこつけて、毛綱モン太の反住器論を書いた。追悼文の代りである。

人は確かに死んでしまつてからの方が、むしろ生きている時よりも輪郭がはつきりする。毛綱を書きながら、若い時のすでに忘れていたディテールがどんどん浮上してくるのに驚いた。

アメリカがアフガニスタンのタリバン政権に向けて報復戦争を準備しているようだ。タリバン指導者が、アフガニスタンには巡行ミサイルで破壊するに価するものは何も無いと述べていたのが印象的だ。砂漠にミサイルを打ち込んでも何も破壊できない。

ヴェトナム戦争でアメリカが勝てなかつたのは、ヴェトナムの密林と田園だった。高価な武器やシステムを使用して破壊するだけの経済的価値が無かつた。砂漠にはもつと何も無い。全国土のほとんどを荒涼とした山岳地帯と砂漠で占めるアフガニスタンはヴェトナムよりも余程やっかいな場所だろう。破壊する以前に、すでに自然によって破壊されているような気配がある。

アメリカが自国のネヴァダ砂漠を核爆発実験場にしたのは、そこが破壊されても構わないと値踏みしたからだ。アフガンは全土がネヴァダ砂漠状の国だ。ヴェトナムの二の舞い、あるいはそれ以上の無益な戦いになるだろう。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、共にその宗教的観念を生みだしたのは砂漠だ。全て砂漠の宗教なのだ。ワールド・トレード・センターに象徴されるニュー

ヨークは都市の象徴だ。しかも資本主義経済が作り出した新しい都市である。都市と砂漠は余りにも価値観がちがう。そのことにアメリカは想像力を働かせなくてはならないのだ。

ブッシュ政権を生み出したのはアメリカの内陸部の保守的な人々であった。今度の多発テロの主舞台に選出された、ボストン、ニューヨーク、ワシントンはゴアを支持していた。つまりアメリカもその内奥は決して一つではない。アメリカは都市と砂漠が同居する国家だ。インディアン居留地のネイティブ・アメリカンの生活はほぼアフガニスタンの的であると聞き及ぶ。

眼には眼を、歯には歯の報復の方法は上手なやり方ではない。砂漠対トマホークでは最初からバランスを失なっている。